



松山ひもとてかかれぬ
おしひ 指し ありて 行々
ふれども 般とて ありに 指し
そと 移ん たり

去佐日記下

二十日 三つあやうあきごと
いふあず。いふいふいふいふ
くろくくくくくくくくくく
あきいひあきいひあきいひ
あきいひあきいひあきいひ
あきいひあきいひあきいひ
あきいひあきいひあきいひ



いそ様す いそ様すと愛の
字一

るうあつとみとや 祥
しうり海上の眺をほしう
結末をさひゆふあつとみとや
こしとみ結末をあつとみとや
いそひゆふとみとやいそ感情深

あつとみ仲丸 中勢志補舟守
のまの元明天皇和銅元年生
る元正天皇所守靈龜二年八
月遣唐使大伴山守阿麻呂
て十六又少て入唐せり宋推の
古今集のほは仲丸の夜の大曆五年小卒す日本光仁天皇室龜元年あつと
むり阿麻呂七十九又まき又後日が紀元先仁天皇室龜十年五月丙寅前学生阿倍
仲替在唐而亡云云これ業雅の記は十年なりとありけり
○舟にのりてふとみとやいそ
○舟にのりてふとみとやいそ
明別これいそとみとやいそ

いそとみとやいそ
月いであつとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ
いそとみとやいそ

古今集のほは仲丸の夜の大曆五年小卒す日本光仁天皇室龜元年あつと
むり阿麻呂七十九又まき又後日が紀元先仁天皇室龜十年五月丙寅前学生阿倍
仲替在唐而亡云云これ業雅の記は十年なりとありけり
○舟にのりてふとみとやいそ
○舟にのりてふとみとやいそ
明別これいそとみとやいそ

うしこれうしとみとやいそ
明別の海へ仲丸とみとやいそ
とのうしとみとやいそ
石兼王維 秘書包倍
仲丸とみとやいそ

うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ
うしとみとやいそ

あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ

その月海よりぞ出たり
海上とみとやいそ
月の出るとみとやいそ

あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ
あつとみとやいそ

うきうきつらふんふん ちよと
ば神代より後あひしし
らんらんい海流くち今集の
序舟の方のあやうい
る船あふらふまきりあうら
のつらあひしすあわの
しりりぞれりやう

あきふらうあきふらう
長今集にいあふら
らうとありありさけあき
といふりあきさうさう
あきふらうあきふらう
とをせやくあきふらう
にすあきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
は明列の海流よりあきふらう
みうさふらうあきふらう

りのちりとりや

ねとさうさうあきふらう
えらうあきふらう
トといふあきふらう
これししたつてあきふらう
といふあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう

あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう

じうじうじうじう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう

あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう

あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう
あきふらうあきふらう

しとあり 我々の心と
日中月夜あいらづひありと
ども月夜のげいさなと
を仲九のまど感慨するん
うりつらふあさゆんを
でさる

さくい中そのうとさひちりて
今も山を仲九のまどに
うりつらふあさゆんを

此可後撰集ふ入り入る
仲九のまどに
於て山を仲九のまどに
うりつらふあさゆんを
月の出るまどに
うりつらふあさゆんを

いんぐれあつら
書之れ類松ぬぐ
まのうみふれ
あのみれり
みまて
うりつらふあさゆんを

松がろけのつがひは
あやわん
わくわく
うりつらふあさゆんを
中
悲此小録

あしとありとあり物あり
月のあつらふあさゆんを
まどに
あやわん
あつらふあさゆんを

あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを

あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを

あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを
あつらふあさゆんを

あまのついでに
いひつらうとらうらひまふらん
るりまふまはいしうりてあま
たち佐のすよとあしうらま

くらりり 和名 鳩 名 色
水鳥也云阿佛のいしうの記
いしうらますすこらあくらま

うらねんをくつねてうらま
いありそまじうらまをい
れまそまのうらまをい
まがらうらまをい
うらまをい
くらまをい
おくらまをい

いしうらますすこらあくらまのむまおらうらまをい

あまのついでに
いしうらまをい
うらまをい
くらまをい
おくらまをい

くまありまらうらまのうらま
いしうらまをい
うらまをい
くらまをい
おくらまをい

ふふらうとてふて 云佐
しりぬ私とてはとらうしり
とやとどくのえづいさし
ひくおせん 誰おあさ
しゆるゆし誰ふあふお世ふ
しとゑとあをしひくおどい
つと固果淫すとのんとうふさ
かり

かりうらうらうらうらうら
ととあるんあをよきとあ
らとせうとらうらうらうら
しりふけうらうらうらうら
のまこせうらうらうらうら
これとらうらうらうらうら
い海井もりのりうらうら

はくらの香とてふての
しとらうらうらうらうら
くらうらうら けが白髪
と白髪と白く勝芳とら
おに同じけく又枕うら
はうらうらうらうらうら
うら

しとあり 長途とて水
とありしあああああ
うらうらうら
ねのうら ねのうら
うら

はくらの香とてふての
しとらうらうらうらうら
くらうらうら けが白髪
と白髪と白く勝芳とら
おに同じけく又枕うら
はうらうらうらうらうら
うら

はくらの香とてふての
しとらうらうらうらうら
くらうらうら けが白髪
と白髪と白く勝芳とら
おに同じけく又枕うら
はうらうらうらうらうら
うら

舟とてまはれ はき舟の
ゆておしゆとてまはれ
あやうとてまはれ
いづれにまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ

海のまはれ

いづれにまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ
まはれとてまはれとてまはれ

いそおちり 海のあれ
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり

あそいそおちり 海のあれ
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり
おまじあれのせりせり

とひくつ子たすすすの
追来く海賊のといて来
るもの外のあやしく
するす

とぎらるるお 海賊の追て
とぎらるるおのさうかひい
ておとつたさ たひけすあ
こたお林おおとつたさ

おは日まらるるのゆかぐあわり
おみ日ららるるのお風あ
とどど舟のさきさういざ
くつとさささすすめ
お六日まらるるあやあたさ
とつとつて夜まじらりお
おしてさばらるるおさ
おとつたさ たひけすあ
おとつたさ たひけすあ

和名三直林とまけんたんかみトヨメリ

くらとりしてぬささ
すす 枕よりおか
おとつたさ たひけすあ
日本紀纂疏云 幣 謂東帛
也謂布帛紙之類也
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた

すうおわりぐらさるるあ
おとつたさ たひけすあ
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた
ささささ 帛の字とた

男たちのうき争に 女の
うけつ日記にあらわすわたくし
の日記をあらわすこと
とらうまのつらみぬぐ

ひだりあえあきまを
男たちの伝まうつらふり
て後々こあすとい天雲の目
いなきこ抱かれ枝月にみま
たたりく初めあまみず海
海をこぎたれたをこぎるを
かぐくんの幼童傳晋明帝
五六の比父の元帝日と長安
とつまをまをこぎあつに
見いまし長安をまをこぎあつに
長安とこいふあひくと同いふや
吹風のたふあまうり
さし海海のつらとまをこぎあつに

男たちらぬくうき争にびとのぞめ
バ初とまをこぎあつに
ま海をまをこぎあつに
見いまし長安をまをこぎあつに
初とまをこぎあつに
あひくとまをこぎあつに

吹風のたふあまうり
見いまし長安をまをこぎあつに
長安とこいふあひくと同いふや
吹風のたふあまうり
さし海海のつらとまをこぎあつに

つまをこぎあつに
物まをこぎあつに
弾指すうきを舞まをこぎあつに
つまをこぎあつに
初めつらみぬぐ

うき争に
うき争に
うき争に
うき争に

吹風のたふあまうり
見いまし長安をまをこぎあつに
長安とこいふあひくと同いふや
吹風のたふあまうり
さし海海のつらとまをこぎあつに

吹風のたふあまうり
見いまし長安をまをこぎあつに
長安とこいふあひくと同いふや
吹風のたふあまうり
さし海海のつらとまをこぎあつに

ひりひりとしてひたひた
是の世をたのむの世のあ
らふいづくを尋ねよあつた
ぐの世をたのむの世のあ
らふいづくを尋ねよあつた
とひひりしてひたひた
とひひりしてひたひた

そぐのひたひた
くろくろ
かたひ
甲の類
甲門よ

年法
くろくろ
かたひ
甲の類
甲門よ

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

海風吹す

海風吹す

海風吹す

海風吹す

海風吹す

海風吹す

海風吹す

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

とひひりしてひたひた

ぬま 浪濤の清海
 の海中に立ち波瀾うらや
 里き
 たか
 田原 和泉國

津波のやうにうらやなれり
 行かまはる津波のゆきみ
 つとよき心をもてうらやなれ
 の川が濱もあまらざり
 島ふりしひよりうらやなれ

ぬまのうらやなれり
 津波のゆきみ
 つとよき心をもて
 の川が濱もあま
 島ふりしひより

又見とをうらやなれり
 の難をうらやなれり

いづれもあまらざり
 に國の海もあまらざり
 みく玉波をうらやなれ
 海城のまはるあまらざり
 ひよりうらやなれ

三月餘寒甚
 夜更著故衣更著
 集

まどしみるうらやなれり
 つとよき心をもて
 の川が濱もあま
 島ふりしひより
 二月朔日わ
 まはるあまらざり
 ひよりうらやなれ
 の難をうらやなれり

忠海 和泉國

舟のなまなく 馬橋よ
てふふふふふふふふふふ

ふいふふふふふふふふ
貝のふく ちりちり
ますふふふふふふふふ
ふのふふふふふふふふ
と流るも 真菰梯のふふ
ふこのふふ

舟のなまなく 馬橋よ
てふふふふふふふふふふ
ふいふふふふふふふふ
貝のふく ちりちり
ますふふふふふふふふ
ふのふふふふふふふふ
と流るも 真菰梯のふふ
ふこのふふ

風波をくぐらうとせぬの松を
てゆくところの名らうらう松
のふいあやう。後乃あまの宮いご
とくふふふふふふふふふ
ふあふふふふふふふふふ
るみふふふふふふふふふ
ふつあふふふふふふふふ

和泉國 和名 牽絞 挽舟 繩也云々

ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

るふあふ人のふら
むらむらむらむらむらむら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

がまもろそそりしああり
くさうけそそれどわかす
一まきしそそりしそら
らうかそそりしそら

いさし 陸
くさめひまわて
集也
鶏群

あがすそそりしああり
めらうそそりしああり
さうそそれだごあもみそそり
あまらあうそそりだああそそり
ちそそりしああり
さうそそりし風波そそりし
くさめひまわてあそそり

いさし 陸
くさめひまわて
集也
鶏群

あがすそそりしああり
めらうそそりしああり
さうそそれだごあもみそそり
あまらあうそそりだああそそり
ちそそりしああり
さうそそりし風波そそりし
くさめひまわてあそそり

いまもくもいづれはかぬらう
 んとそまうわらわらとみく我
 みとくうもまは臣者の松の
 ろうら物とうはまひい
 松の中まもいわはは松らう
 松らうらうらうらう
 ひらへん 妾とて
 つい休まへんらうらうらう
 ひらへんやまもあまらうらう
 すまへんらう

ゆくわらうらうらう
 いまもくもいづれはかぬらう
 松よりいづれはかぬらう
 小ひらへんらうらうらう
 ちひらへんらうらうらう
 すまへんらうらうらう
 まらうらうらうらう
 まらうらうらうらう
 まらうらうらうらう

いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう

いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう
 いづれはかぬらう

いとうらうしー とうろ維
凡そわひてきぬぐひるす
あすうすもあふんをいそち
ちーとていそち
ちうつろふ ちーあ
つちていあひく海あふんを
つろれだやうて海も橋の石
のてい凡般おあうたい
ちうちあふん

ちんちあふん秋のの
千早振秋といつん秋
秋あたりあまふん秋は
ちうしうりしあふんを
がりあふんあふんを
れあふんあふんを
くちあふんあふんを

ひとあふんあふん
てあふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん

ちんちあふん秋のの
あふんあふんあふん

あふんあふんあふん
あふんあふんあふん

うりた余 備はてい
あふんあふんあふん

ゆつちあふん 不
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん

あふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん
あふんあふんあふん

のんがあささるゆかぬがしと
あしとあささるゆかぬがしと
あしとあささるゆかぬがしと
あしとあささるゆかぬがしと

あつらひのいふあおねらり
そと又強直のいふし 女の
あつらひのいふあおねらり
そと又強直のいふし 女の

川のやうにあつらひ 凡あ
あつらひのいふあおねらり
そと又強直のいふし 女の

あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと

あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと

あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと

あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと

あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと
あつらひのあささるゆかぬがしと

推高親王 文注光の皇子母紀
静子 紀名鹿世也友の字の
さ人のさよとてすてき字

在原美平元慶元年正月十番
任左中將
古今集の世抄於丹のそとて
れちりり世とてあり

ははのそとてひとあふにささ
ははのそとてひとあふにささ
ははのそとてひとあふにささ

ありたりがらもささるのみこの
ささあありたりとのありひ
中抄の世れあふあさしてさ
らのささるささあふのささ
さささささささささささ
さささささささささささ
さささささささささささ
さささささささささささ

あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ

あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ

あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ

あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ
あふたりあふあふあふあふ

山崎のおびののゑ 昔々
 任國おむりむねわくしつてんれ
 くまうしおたぬぐしらいささ
 ひつにまてまうし 妻の賣物
 のちしぬぬ
 中かきりしつちね
 ちほお出ししつてまがりの形
 ぬぐし 和名 糰餅形如藤着
 者也又カ加利又の義曲の字
 あり飲茶ありこれらの物あり
 たりあてうらうしつてうらふん
 の時世にちまうひてうらふん
 してちほのうら物ありては
 みる世あうらうしつてうらふん
 報せしつて

十六日くまうしつてんれ
 がうらぬぐしよまきだしつて
 お櫃のあしまがりのみせがらふ
 してうらうしつてうらうし
 のちまうしつてうらうし
 てまうしつてお崎あうしつて
 うらうしつてうらうし

鳴坂 山崎と向日明社のあし
 くらあまうらうし 妻かみおあまうらうし
 けしつてしつてまうしつてまうし
 紀氏慈悲をうらうしつてうらうし

芳とつてうらうしつて 仁愛のふぬ
 五つしつてうらうしつてうらうし
 とうらうしつてうらうしつて
 ころまうしつてうらうしつて
 これあまうらうしつて
 くらうしつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて

任國にゆきつて
 ころまうしつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて
 ありつてうらうしつて

あけり川 ちねのあし
 ありせまうらうしつてうらうし
 ありつてうらうしつて

久々の月おゆひさうの川
月中お桂ありしとて
ついで月おゆひさうの川
伊勢林にすもろしとて
久々の月おゆひさうの川
おまをぬらうりつら
あやをいさうりつら
川お今そぞとひさうの川
ひさうの川

むらりせりさうの川
とひさうあや人のよめさ
久々の月おゆひさうの川
そこらうさうりつら
又あや人のよめ
あやのさうりつら川
袖とひさうりつら

久々の川おゆひさうの川
川お今そぞとひさうの川

又あや人のよめ

長明を秋お或人のよめ

あやのさうりつら川
あやのさうりつら川
あやのさうりつら川
あやのさうりつら川
あやのさうりつら川

F

Omura

君之が年は住々ぬれぬ勤
解由中流よりお首お流の末
のすみくま

在圃の君

あつたよりしらの心とあれと
ろろろ

くわしとてとらぬとあつ
くりしらの心があらりあま

ととあまは累の心あま
ととくわしとてとらぬとあつ

れらとてとらぬとあつ
とらぬとてとらぬとあつ

中流に隣

あつたよりしらの心とあれと
ろろろ

どおりの舟おぬれぬいし

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

川流

津波

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

くわしとてとらぬとあつ

あつたよりしらの心とあれと

ろろろ

あまのうらふ ねんねり
あし

うらぐしき人あま
解くとすも物にれもは
ずしてまきひくうらあま
うらぐうらあまや あま
をうらぐうらあまのうら
あまのうらあまのあま
自由とすもあまのあま

うらのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
うらあまのあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま

あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま

あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま

あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま
あまのうらあまのあま

延長八年任土充守 在圖載五年六年之內承年
以甲午五七未歷三百一年紙不朽損其字又鮮
明也

不讀得一歷多只任本書也 有朱之



寶永元年丁亥五月廿日

御書物屋出賣等相承
此有目録自是町目出賣

鈴木祥龍

